

2002 年度夏学期テキスト理論レポート

価値形態論

理科 I 類 1 年 240032C 太刀岡勇気

序論

マルクスの資本論で核をなしている考えはなんだろうか。それはやはり第一章に据えられている商品の分析の部分だろう。資本論の理論はすべて商品の分析から派生したものであり、そこから始まっている。そこでここでは第一章商品そのなかでも特に価値形態論を中心にその経済学史的における役割、ヘーゲルとマルクス、有名な宇野一久留間議論などを取り上げ研究してみたい。そしてマルクス経済学は現在なぜ重要視されていないのかを考えたい。

第一章 概説マルクス価値形態論

第一節 資本論第一章商品の流れ

第一部 資本の生産過程は、商品→貨幣→資本の順で分析が進む。そのなかの第一篇第一章 商品では、第一節 商品の二つの要因 使用価値と価値（価値実体 価値量）と第二節 商品に表される労働の二重性で使用価値を生み出す具体的有用労働と価値を生み出す抽象的人間労働という労働の二面性を説明し、価値の内容もしくは実体規定を行い、第三節 価値形態または交換価値において、①商品形態の分析によって得られた価値の概念から単純な価値形態の発生を証明し、②単純な価値形態から貨幣形態までを形態的に展開することで価値の形態の規定を行っている。そして、第四節 商品の呪物的性格とその秘密では、ものに価値がへばりつくという呪物的性格を解明することで、価値の実体（内面）と形態（外面）とを統一するという流れになっている。

第二節 価値形態論の流れ

ここでもにも扱う第三節の価値形態論は A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態から「価値をまったく限られたもの一面的なもの」とする不充分性を解決ために、B 全体的な、または展開された価値形態に移行し、Bの2つの欠陥（補節）を解決する C 一般的価値形態に不可避免的に移行する。Cと D 貨幣形態は本質的に同じものであり（現実の貨幣形態を考えるためにCはそれをモデル化したものだから）、Cの段階をもって価値形態の展開・移行は終了するという順序でかかっている。

補節 全体的な、または展開された価値形態の欠陥

欠陥はおもに次の2つにまとめられる。

第一にAのように唯一の他商品で表されるという「単純性」の欠如があげられる。これは20エレのリンネルがいろいろな違った形態で表されているということを見れば明らかである。そこにはAのような分かりやすさはなく、20エレのリンネルの価値が何なのかがよくわからなくなってしまう。

第二に「統一性」の欠如した形態であり、諸系列間の「共同性」が排除されているということがあげられる。これはマルクス自身が「この連鎖（一つの価値等式が他の等式につながって作る連鎖）はばらばらな雑多な価値表現の多彩な寄木細工をなしている。(MEW23 79)」と書いているように、A の形態をどんどん足していったものであるという B の性質から現われるもので、いろいろな価値表現の雑多な集合になってしまっている。また「ここでは各個の商品種類の現物形態が、無数の他の特殊的等価形態と並んで一つの特殊的等価形態なのだから、およそただそれぞれが互いに排除しあう制限された等価形態があるだけである。同様に、それぞれの特殊的商品等価物に含まれている特定の具体的な有用な商品種類も、ただ、人間労働の特殊的な、したがって尽きることのない現象形態でしかない。人間労働は、その完全な、または全体的な現象形態を、たしかにあの特殊的諸現象形態の総範囲のうちにもってはいらぬ。しかし、そこでは人間労働は統一的な現象形態をもっていないのである。(MEW23 79)」

第三節 価値形態論理解の困難

価値形態論が難解な理由をマルクスは次のように述べている。

貨幣形態をその完成した姿とする価値形態は、非常に無内容で簡単である。それにもかかわらず、人間精神は二千年以上も前から空しくその解明に努めてきたのであり、しかも他方では、これよりずっと内容の豊富な複雑な諸形態の分析に、少なくとも大体のところまでは、成功したのである。なぜだろうか？ 成育した身体は身体細胞よりも研究しやすいからである。そのうえ、経済的諸形態の分析では、顕微鏡も化学試薬も役には立たない。抽象力がこの両方の代わりをしなければならない。ところが、ブルジョア社会にとっては、労働生産物の商品形態または商品の価値形態が経済的細胞形態なのである。教養のないものには、この形態の分析はただあれこれと細事のせんさくをやっているだけのように見える。じっさい、そこでは細事のせんさくを事とするにはちがいない。しかし、それは、ちょうど、顕微解剖でそのようなせんさくがなされるのと同じことなのである。(MEW23 12)

価値形態をより簡単な小さい単位に還元して考えるということをやることが今まで行われることがなく、誰も気づかなかったことなのでその研究対象の性格（現在の状況を、抽象力を用いて細かく還元して考えなければいけないこと）と研究方法（細かいことをあれこれ考えなければいけないこと）ゆえに難しく感じられるということである。

マルクスは「すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちにひそんでいる。(MEW23 63)」 「単純な商品形態は貨幣形態の萌芽なのである。(MEW23 85)」と述べているように、貨幣形態を発展した価値形態と捉え、貨幣形態の謎は価値形態の基本的な謎が発展したものであるため価値形態の基本形を考察することが大切だと考えたのである。

第四節 価値形態論の課題

次に価値形態論の課題について考えてみたい。

いまここでなされなければならないことは、ブルジョア経済学によってただ試みられたことさえないこと、すなわち、この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまでを追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである。(MEW23 62)

すなわち、商品の価格（貨幣形態）の謎を、そしてそれと同時に、貨幣の謎を解く（商品の価値が現象する形態を明らかにする）事が目的である。ここで、貨幣形態の謎とは、商品の価格が特殊の一使用価値（金）の一定量という形態で表現されることの謎であり、貨幣の謎とは金の使用価値（本来価値の反対物たるもの）がそのまま一般に価値として妥当することの謎のことである。そしてそれは、

金が他の諸商品に貨幣として相対するのは、金が他の諸商品にたいしてすでに以前から商品として相対していたからにはほかならない。すべての他の商品と同じように、金もまた、個々別々の交換行為で個別的等価物としてであれ、他のいろいろな商品等価物と並んで特殊的等価物としてであれ、等価物として機能していた。しだいに、金は、あるいはより狭いあるいはより広い範囲のなかで一般的等価物として機能するようになった。(MEW23 84)

に端的に表れている。

第五節 マルクスの貨幣生成論は古典的な生成論とどの点が異なっているのか。

それではマルクスの貨幣生成論はどの点がそれまでの経済学でいわれていた貨幣生成論と異なるのだろうか。

①古典的な貨幣の生成論（アダム＝スミス国富論第1編第4章「貨幣の起源と用途について」を中心に）

スミスの貨幣生成論は、簡単に言えば、まず人間の交換性向から分業が始まり、時間とともに分業が確立すると、自己生産物のうちの自己消費部分は減少し、消費の大部分を他人の生産物との交換に依存しなければならなくなる。そこで、交換の必要が生じるが、余剰物を持つ生産者が他の生産者の余剰物と交換しようと思っても、その人の必要とするものを持たなければ交換はおこりえず、物々交換は困難に陥る。そこで、「すべての慎慮ある人 (every prudent person)」は、「このような事態の不便を避けるために」、「誰でも自分たちの労働生産物と交換するのを拒否しそうにないと考えある商品の一定量を自分の生産する商品とほかに手元に置いておこう」と考え、誰からも受け取りを拒まれない商品を手元におくことにする。そして、その商品ははじめは農工具などの実用品であったが、徐々に貴金属を主とする貨幣に変わっていった、というものである。

ここでは貨幣は「商業の共通の用具」とされている。道具であるから貨幣が価値尺度機能を持っているのは便宜的であり、本来の価値は別にあり、それは労働であると考えたのである。ではなぜそう考えたのか。

それはスミスとリカードは、「尺度財は普遍の価値をもつ」という考えを強くもっていたからである。スミスは、『「ただ労働だけが、すべての商品の価値があらゆる時代にそれによって評価され比較されうる最終の真実な尺度であるということ」を証明しようとした。(MEW23 61)』すなわち、普遍の尺度の位置に労働をおき、貨幣の尺度機能の位置を相対的に低めた。

またスミスは価値を交換価値と使用価値に二分した。使用価値には、特定の対象の効用という形でとらえただけでありあまり触れず、焦点を交換価値に絞った。交換価値を「他の財貨に対する購買力」とし、その尺度を「ある商品の価値は（中略）その人に購買または支配させ得る労働の量に等しい。それゆえ、労働は一切の商品の交換価値の実質的尺度である」としいわゆる支配労働に求めた。これに対しいわゆる投下労働には「あらゆるものの実質価格、つまりあらゆるものがそれを獲得しようと欲するものに現実に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と煩勞である」「彼の健康・体力及び精神が平常の状態で、また彼の熟練及び技巧が通常程度であれば、彼は自分の安楽、自分の自由及び自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならない」としマルクスの抽象的人間労働の概念と近い概念を提唱した。支配労働と投下労働とは、例えば、投下労働とは自分が自由に使えたはずの夏休みを使ってアルバイトをするということであり、支配労働とは、10kg5000円のコシヒカリを買ったときにそれを作るのに誰かが投入した労働のことである。そしてこの両者が一致しないときに、すなわち自分が投下した労働より大きな支配労働を得るとき、剰余の問題が起こるというのもマルクスの考えと非常によく似ている。しかしこれはマルクスが第二版への注で指摘しているように、「ここでは商品の生産に支出された労働量による価値の規定を、労働の価値による商品価値の規定と混同しており、（中略）彼は、（中略）この支出を再びただ休息や自由や幸福の犠牲と考えているだけで、正常な生命活動だと考えていない(MEW23 61)」ところでマルクスのそれとは異なっている。

リカードの労働価値論は、スミスのように支配労働を価値尺度とするよりも投下労働を尺度としたほうが優れているとして投下労働一元説を提唱した点にその特徴があるが、結局価値の絶対的尺度の探求したという点では同じである。このリカードの研究が、相対的価値と絶対的価値という価値と価値形態との関係にとって極めて重要な問題を提起することになったが、労働価値論は価値形態論と結びつくことがなかった。まさに、そこがマルクスの問題とするところなのである。

古典派経済学の根本的欠陥の一つは、商品の、また特に商品価値の分析から、価値をまさに交換価値となすところの価値の形態を見つけだすことに成功しなかったということである。A・スミスやリカードのような、まさにその最良の代表者においてさえ、古典派経済学は、価値形態を、まったくどうでもいいものとして、

または商品そのものの性質には外的なものとして、取り扱っているのである。その原因は、価値量の分析にすっかり注意を奪われてしまったということだけではない。それは、もっと深いところにある。(中略) この生産様式(ブルジョア的生産様式)を社会的生産の永遠の自然形態と見誤るならば、必然的にまた、価値形態の、したがって商品形態の、さらに発展しては貨幣形態や資本形態などの独自性をも見損なうことになるのである。それだから、労働時間による価値量の計測についてはまったく一致している経済学者たちのあいだにも、貨幣、すなわち一般的等価物の完成した姿については、もっとも雑多な、もっとも矛盾した見解が見られるのである。(MEW23 95)

②マルクスの貨幣の生成論

マルクスの貨幣生成論はこれを批判する形で生み出され、商品の潜在的困難を克服するために商品の世界から生み出されるのが貨幣であり、貨幣は特殊で絶対的なものでなく、たまたま数ある商品の中から商品の価値を相対的に規定するものとして選ばれたものであると考えた。それは次の記述に現われている。

一商品の等価形態は、その商品の価値の大きさの量的な規定を含んではいない。金が貨幣であり、したがってすべてのほかの商品と直接に交換されうるものだけということを知っていても、それだからといって、例えば10ポンドの金にどれだけ価値があるかが分かるわけではない。どの商品もそうであるように、貨幣もそれ自身の価値量をただ相対的に他の諸商品で表すことができるだけである。貨幣自身の価値は、貨幣の生産に必要な労働時間によって規定されていて、それと同じだけの労働時間が凝固している他の各商品の量で表現される。(中略) 困難は、貨幣が商品だということを理解することにあるのではなく、どのようにして、なぜ、なにによって、商品は貨幣であるのかを理解することにあるのである。(MEW23 107)

マルクスの価値形態論はアリストテレスのそれを前提としている。

価値形態論を展開するにあたって、商品の使用価値から区別された同質性・同等性を認めること、をマルクスは重視した。そしてアリストテレスは、それにある程度気づいていた。「アリストテレスの天才は、まさに、彼が諸商品の価値表現のうちの一つの同等性関係を発見しているということのうちに、光り輝いている。(MEW23 74)」しかしアリストテレスは「生きていた社会の歴史的限界」、すなわち「ギリシアの社会が奴隷的労働を基礎とし、したがって人間やその労働力の不当性を自然的基礎としていた」ために「価値表現の秘密、すなわち人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性及び同等な妥当性」に気づかなかつたのである。つまりマルクスはアリストテレスが気づかなかつた労働価値論を同質性と二本柱とすることで価値形態論を論じたのである。そこにマルクスの回り道の意味がある。

補節 マルクスの回り道

マルクスは価値方程式を作る上で両者を直接結ぶのではなく、抽象的人間労働という第三者の価値を持ち出すことで間接的に結んだ。それでは抽象的人間労働を考えることはなぜ必要なのか。

一商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちどのようひそんでいるかを見つけ出すためには、この価値関係をさしあたりまずその量的な面からはまったく離れて考察しなければならない。人々はたいていこれとは正反対のことをやるのであって、価値関係のうち、ただ、二つの商品種類のそれぞれの一定量が互いに等しいとされる割合だけを見ているのである。人々は、いろいろなものの大きさはそれらが同じ単位に還元されてからはじめて量的に比較されるようになるということを見落としているのである。ただ同じ単位の諸表現としてのみ、これらの物の大きさは、同名の、したがって通約可能な大きさなのである。20エレのリンネル＝一着の上着であろうと＝20着の上着であろうと、または＝x 着の上着であろうと、すなわち、一定量のリンネルが多くの上着に値しようと、少ない上着に値しようと、このような割合は、どれでもつねに、価値量としてはリンネルも上着も同じ単位の諸表現であり、同じ性質の諸物であるということを含んでいる。リンネル＝上着というのが等式の基礎である。(MEW23 64)

つまり、人は何かを等式で結ぶときにそこに共通な量がなければわからない。そして『価値を形成する実態』の量、すなわち労働の量」で価値の大きさを測ろうとした。そしてあまり詳しい論証なしに多少強引に

だから、ある使用価値の価値量を規定するものは、ただ、社会的に必要な量、すなわち、その使用価値の生産に社会的に必要な労働時間だけである。個々の商品は、ここでは一般に、それが属する種類の平均見本と見なされる。したがって、等しい大きさの労働量が含まれている諸商品、または同じ労働時間で生産されることのできる諸商品は、同じ価値量をもっているのである。一商品の価値と他の各商品の価値との比は、一方の商品の生産に必要な労働時間と他方の商品に必要な労働時間の比に等しい。「価値としては、すべての商品は、ただ、一定の大きさの凝固した労働時間でしかない。」(MEW23 54)

商品の価値は、ただの人間労働を、人間労働一般の支出を表している。(MEW23 59)

すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成するのである。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間の労働力の支出であって、この具体的有用労働という属性においてそれは使用価値を生産するのである。(MEW23 61)

として抽象的人間労働を導入した。価値量を抽象的人間労働に求めたところが今までの経

済学とは異なっており、マルクスの相対的価値論の最も重要な特徴である。そして抽象的人間労働と具体的有用労働の二面性を規定することで価値の実体規定を行った。

第二章 ヘーゲル弁証法とマルクスの価値形態論の定位の問題

第一章 ヘーゲル弁証法とマルクスの価値形態論

このテーマに入る前にマルクスがヘーゲルについて述べている部分を見てみよう。

私の弁証法的方法は、根本的にヘーゲルのものとは違っているだけではなく、それとは正反対なものである。ヘーゲルにとっては、彼が理念という名のもとに一つの独立な主体にさえ転化させている思考過程が現実的なものの創造者なのであって、現実的なものはただその外的現象をなしているだけなのである。私にあっては、これとは正反対に、観念的なものは、物質的なものが人間の頭の中で転換され翻訳されたものにほかならないのである。(中略) それだからこそ、私は自分があの偉大な思想家の弟子であることを素直に認め、また価値論に関する章のあちこちでは彼に特有な表現様式に媚を呈しさえしたのである。弁証法がヘーゲルの手のなかで受けた神秘化は、彼が弁証法の一般的な諸運動形態をはじめて包括的で意識的な仕方ですべてということ、けっして妨げるものではない。弁証法はヘーゲルにあっては頭で立っている。神秘的な外皮のなかに合理的な核心を発見するためには、それをひっくり返さなければならないのである。(中略) それは、現状の肯定的理解のちに同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み、いっさいの生成した形態を運動の流れのなかでとらえ、したがってまたその過ぎ去る面からとらえ、なにものにも動かされることなく、その本質上批判的であり革命的であるからである。(MEW23 27,28)

自分の弁証法はヘーゲルと違っているとしながらも、価値論に関してはヘーゲル弁証法を用いているということを確認、その利点についても評価している。この記述によってヘーゲルとマルクスをどう定位させるかという問題が生まれたわけであるが、ここではヘーゲル弁証法について簡単にまとめた後で代表的な2説を紹介したい。

準備 ヘーゲル弁証法の簡単なまとめ

ヘーゲル弁証法は、「あらゆる事物は判断である」ということを前提においてその判断を4つに分けた。まずはそれを簡単に見ていこう。

A 定有の判断

「チューリップは花である。」というのがそれにあたる。すなわち主語の部分の個別的なものが述語部分の普遍的なものであらわされるという形式のものであり、主語と述語は絶対に一致することはなく、主語の集合が述語の集合よりも小さくなる。

B 反省の判断

「この植物は薬になる」というのがそれにあたる。これは外的判断を必要とするもので、この例だと人間の判断でこの植物は薬になるということがいえるのである。

C 必然性の判断

(1)実態

(2)形態

(3)両者の統一

(1)定言判断

「金は金属である」というのがそれにあたり、述語が主語の実態若しくは本性を表している。

(2)仮言判断

「もし会社があるなら社員がいる」というのがそれにあたり、述語は主語の存在根拠となっている。

(3)選言判断

「AはBであるかCであるかDであるかである」というのがそれにあたり、B,C,DのいずれかのものがAの実態を表しているといえる。

D 概念の判断

(1)実然の判断

(2)蓋然の判断

(3)確然の判断

(1)「この家はよい」というのがそれにあたり、主語が特殊なのに対して述語が普遍になっている。

(2)「これこれの性状のときの家はよい」というのがそれにあたり、主語が主語の概念（客観的本性「家」）と主語の個別性（外面的性状「これこれの性状のときの」）の二つの関係性による二重性を持っている。

(3)「これこれの性状の家はよい」というのがそれにあたり、主語と述語の概念が完全に一致している。

第二節 武市健人氏の主張

氏は、資本論の価値形態論とヘーゲルの弁証法において次の（ア）～（エ）のように述べている。

（ア） A単純な、個別的な、または偶然的な価値形態とA定有の判断

（例）A リンネルの価値をリンネルで表現することはできない。20 エレのリンネル=20 エレのリンネルは決して価値表現ではない。この等式が意味しているのは、むしろ逆のことである。すなわち、二十エレのリンネルは二十エレのリンネルに、すなわち一定量の使用価値対象リンネルに、ほかならないということである。つまり、リンネルの価値は、ただ相対的にしか、すなわち別の商品でしか表現されえないのである。(MEW23 63)

にあらわれおり、個別であるものの主語をより普遍的な述語とつなげる定有の判断では、必ず述語側の集合のほうが大きく両者が一致することはありえない。述語側の集合をより特殊なものに替えていくと（例えば人は動物である。→人は哺乳類である。→人は哺乳類で

ある。→人は人である。となり) 最終的には両者が一致してしまう。一致したとき主語を述語で表しているかという点を決してそのようなことはいえない。それが、マルクスが上の部分で述べていることである。

(イ) B 全体的な、または展開された価値形態と B 反省の判断

(例) ある一つの商品、たとえばリンネルの価値は、いまでは商品世界の無数のほかの要素で表現される。他の商品体はどれもリンネル価値の鏡になる。こうして、この価値そのものが、はじめてほんとうに、無差別な人間労働の凝固として現われる。(MEW23 77) にあらわれている。すなわち主語と述語が抽象的労働という外的判断を用いてつなげられているということである。

(ウ) C 一般的価値形態と C 必然性の判断

(例) いろいろな商品はそれぞれの価値をここでは (一) 単純に表している、というのは、ただ一つの商品で表しているからであり、そして (二) 統一的に表している、というのは、同じ商品で表しているからである。諸商品の価値形態は単純で共通であり、したがって一般的である。(MEW23 79) というところからわかるように、主語の実体を表す述語すなわち一着の上着の価値を表すものとしての 20 エレのリンネルという概念、またその両者の統一という点でまさに必然性の判断の考え方に一致する。

(エ) D 貨幣形態と D 概念の判断

貨幣形態においては、主語である 20 エレのリンネルと 2 オンスの金が完全に一致しており、一般的に等価なものとして扱われている。まさにこれは概念の判断にほかならない。

武市氏はこのようにヘーゲル弁証法とマルクスの価値形態論がそれぞれ定位していると考えられる。

第三節 尼寺氏の主張

まず価値形態論は貨幣形態から順々にさかのぼっていく過程においてできあがったものであるから、C は D の、B は C の、A は B の還元された形態をとっている。すなわち、A においても「20 エレのリンネルは一着の上着に値する。」というのは、20 エレのリンネルは一着の上着としか交換できないということではなく、たくさんのものでなからたまたま一着の上着が選ばれたものであると考える。そして B 以降においては必ず値する物の方は複数になっている。形式上述語が複数であるか単数であるかにかかわらず価値形態は統一的に、主語の実態を選択的な述語で表す C(3) によっていると考えるべきである。

すなわち尼寺氏はマルクスはごく初期の価値形態 (A が生じるまで) では武市氏と同じように A 定有の判断 によっていると考え、それが発展する段階では C(3) 必然性の判断 (選言

判断) によっていると考えるのである。

マルクスは価値形態論を書く上である統一的な判断に基づいて書いていたと思われるので、武市氏のように毎回判断の種類が違うものよりも尼寺氏のように一貫した判断のもとに書かれたとするものの方が妥当性があると思われる。

第三章 宇野 vs.久留間論争

宇野 vs.久留間論争

この論争は久留間氏によると三点の宇野氏の主張に対する反論にまとめられる

① 宇野氏の主張＝簡単な価値形態においてなぜ特定の商品が等価形態に置かれているのかは相対的価値形態にある商品の所有者の欲望を抜きにしては理解されえない。だから価値形態論では商品所有者の欲望が演じる役割が捨象されていると考えるのは間違っている。

久留間氏の反論＝マルクスは価値方程式（商品の価値＝商品の使用価値）を所与の事実として受け取っているので、そのようなことは考える必要がない。

② 宇野氏の主張＝所有者を考えない限り、相対的価値形態にある商品と等価形態にある商品とがなぜそれぞれの形態にあるかがわからなくなり、どちらの商品がどちらの形態にあっても同じことだということになる。価値を能動的に表現する要求は所有者が持つ要求であり、一定の商品が相対的価値形態にあるのは、所有者があるからだ。これに反して等価形態にある商品は観念的にあるので、現実的には所有者もまだ現われていない。こう考えてみてはじめて価値形態の主體的把握が可能になる。

久留間氏の反論＝価値方程式を所与のものとして受け取っている以上 $(X = Y) \neq (Y = X)$ は明らか。もっとも正常な交換比率として客観的に確立されている状態を前提すれば $X=Y$ と同時に $Y=X$ も成立している。価値形態論においては商品が主体であり所有者は商品のロボットである。

③ 宇野氏の主張＝C 一般的価値形態に対する D 貨幣形態の本質的な差異は商品所有者の欲望を考慮に入れることではじめて明瞭になる。すなわち一般的等価物が貨幣になると、その本来の使用価値ゆえに欲求される。したがって、それによって、商品の価値が表現されるという関係にとどまらなくなる。この特徴を無視すると C と D のあいだに本質的な区別がたてられなくなる。

久留間氏の反論＝マルクスがわれわれの前に現実に与えられているのは貨幣形態であるからそれを最後の形態とするのはむしろ当然。この貨幣形態の謎を解くためにこれを C に還元する必要がある。あらゆる商品が左辺に立ち特殊の一商品が右辺にあるこの形態においてはじめて「一商品は、それにおいて他の諸商品が全面的にそれらの諸価値を表現するがゆえにはじめて貨幣になるのだ」という本来の関係が如実に顕現する。すなわち価値形態論では、欲望を捨象しないと価値形態の根本の謎がわからないということである。

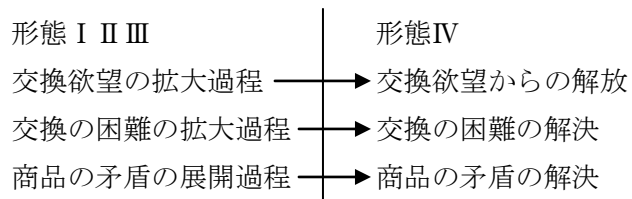
この問題についてマルクスは、

形態 I (A)から形態 II (B)への、また形態 II (B)から形態 III (C)への移行では、本質的な変化が生じている。これに反して、形態 IV (D)は、いまではリンネルに代わって金が一般的等価形態をもっているということのほかには、形態 III と違うところは何もない。(MEW23 84)

と書いている。形態ⅢからⅣへの移行は、それまでの本質的な変化と反して、と書いているので本質的な変化はなく、CとDのあいだに本質的な区別を立てる必要はない。

③に対する補題 変体系列の展開・移行における宇野氏の理論

簡単な価値形態→拡大された価値形態≠全体的な価値形態



なぜ宇野氏はマルクスが本質的差異はないといっているのにもかかわらず、これほどまでに形態ⅢとⅣのあいだに断絶を求めるのだろうか。それはマルクスがはじめの時点で価値方程式を所与のものとしてやや天下りの的に与えたことに、宇野氏が反発し人間主体の経済学を目指そうとしたからではないか。

氏の経済学は「商品は売り手にあるものなのだ」ということを前提とし、価値のもつ同質性と使用価値のもつ異質性を用いながら人間の欲望に基づいた価値形態論を主張した。本来価値形態論では交換過程論と違って欲望を捨象するのが定説であったから、氏の主張は新鮮なものであったが、やはり価値形態論においてはそれは説得力のあまりないものになってしまっている。特に最近では宇野氏の研究を批判することでマルクスの経済思想を明らかにするというのがはやりのようであり、宇野氏とマルクスというのは価値形態論において好対照を成している部分があり、マルクスの価値形態論を読む上では欲望を捨象したほうがよいようである。

まとめと主張

マルクスは資本論でもっとも言いたいことである資本を明らかにする上で貨幣、商品とさかのぼって書いた。また、その商品→貨幣の過程においても現在の貨幣形態→一般的価値形態→全体的なまたは展開された等価形態→単純な、個別的な、または偶然的な価値形態とさかのぼって考えた。そしてマルクスはそれを前のより単純な形態のほうから筆を起し、それが進化していくように弁証法を用い順を追って書いていった。これがマルクスのうまいところであり、このことによって自然と資本論の説得力が増している。そしてその過程で過去のアダムスミスやリカードといった絶対的価値論をとなえた経済学者たちを批判し、相対的価値論すなわち抽象的人間労働を尺度とする価値形態論を提唱した。

しかし抽象的人間労働などというのは本当にあるのだろうか。物の価値が下落する理由としてマルクスがあげている生産手段の効率化のほかに、需要量・供給量という要素が大きくかかわってくる。例えばある時期「たまごっち」が異常な人気を博したときがあった。このときは連日品切れ状態でどんどんプレミアがついた。本来の値段としては大体普通の単行本一冊分くらいの値段であったが、プレミアがついて10倍くらいになった。どうしても手に入れたかった人はこれでも買ったわけであるから、等式で書けば、本一冊＝たまごっち→本十冊＝たまごっちとなったわけである。しかし、販売元のたまごっちにかかる労働量が増えたわけでもなんでもないのでこの等式の両辺における抽象的人間労働はつりあわない。そして調子に乗ってたまごっちを作りすぎたメーカーはブームが去ると全然売れなくなり、またたまごっちの価値は下落した。このようなことは技術革新よりも高い頻度で起きているわけであり、例外と言い切ることはとてもできない。

なぜマルクス経済学はこれほどまでに力を失ってしまったのか。それはマルクス経済学というのは現状を分析する経済学というよりもむしろ経済思想であるということがその原因だろう。価値などというものは記号のようなものであり、それを必死に考えたところで実益は出ないだろうから、今経済の現状を数理的に解析している経済学者で価値とは何かと考えている人はほとんどいないであろうし、経済学は微分方程式を用いて未来を予想するという数学や物理のような学問になってしまった。つまり、いまやマルクス経済学というのは社会科学ではなく、人文科学であるというように思われるのである。実際、市場を分析する上ではマルクスが批判した古典派経済学のほうがよっぽど使えるということは明らかである。今なぜマルクスが読まれないか。その原因は共産主義が終わったということよりも、マルクス経済学の社会科学としての実用性のなさのほうが大きいのではないか。

参考資料

テキスト理論

資本論 岡崎次郎訳 大月書店（国民文庫）

価値形態論 尼寺義弘 青木書店

価値形態論と交換過程論 久留間鮫造 岩波書店

価値形態論 中野正 森田企版

貨幣理論の形成と展開 奥山忠信 (社会評論社)